

長編ドキュメンタリー・ノベル 書下ろし

拉(らち)致 小説・金大中事件の全

なか ぞの えい すけ
中 蘭 英 助

お願い

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編ドキュメンタリー・ノベル 拉(らち)致

昭和58年4月25日

初版1刷発行

定価680円

著者	中 蘭 英 助
発行者	大 坪 昌 夫
印刷者	盛 庄 吉
	東京都文京区水道2-4-26 慶昌堂印刷

発行所

東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347

株式会社 光文社
電話 東京 (942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替いたします。(榎本製本)

表紙の模様・意匠登録 116613 © Eisuke Nakazono 1983

ISBN4-334-02500-5

Printed in Japan

長編ドキュメンタリー・ノベル 書下ろし

拉(らち)致 小説・金大中事件の全貌

なか ぞの えいすけ
中 菌 英 助



カッパ・ノベルス

目次

序章 謀議

第一章 五人の男たちと影の政府との戦いの章

第二章 虚々実々の警備と密行が功を奏する章

第三章 白昼堂々の抹殺作戦の罫わなに進み入る章

第四章 物として神の前に顯あらわれざるはなしの章

後記

5 13 87 175 221 263

本文イラストレーション
イラスト資料提供

辰巳四郎
毎日新聞社
共同フオト

序章 謀議——東京・一九七三年七月某夜

その夜、二ノ橋から南麻布の仙台坂を上がった途中にある外国公館の別館では、六、七人の要員をそろえた秘密会議が開かれていた。

本館裏のコンクリート建て二階の一室だが、別館はかたわらのプレハブ家屋とともに保安地域に定められており、昼間でも一般の館員は出入りを許されていない。

敷地内で最も静かな一画だ。窓には黒っぽいカーテンがひかれ、明かりが外に洩れ出るのを防いでいる。

「皆さん、そろいましたね」

と、会議の招集者が口をきった。

白髪の目立つ、五十がらみの端正な紳士だが、額には

暗い苛立ちの翳りがある。かつてKCIA、すなわち韓国中央情報部の心理作戦部門を担当した第七局長、現在は駐日情報担当公使の金存権だ。

金存権は、本名ではない。本名は別にあつた。

彼をよく知る者は、むしろ擲揄と尊敬とを半々にこめて、『詩人公使』と呼ぶことが多かった。じっさい詩人か、さもなければ大学教授になりたかつたのだ。

金芝河のような、泥臭い反体制詩人は軽蔑して、もっと高尚な、きらびやかな言葉を連ねる形而上詩人をもって任じていた。

彼は、列席者の一人一人の名前を、荘重な芝居がかつた声音で呼んだ。

自分と同じように、情報関係者はことごとく、偽名であることを知っていた。

「尹英学参事官！」

「はい」

と、内務駐在官としてはナンバー・ツー、在日KCIAの会計を担当している尹参事官は答えた。

「韓尚石二等書記官！」

「はあ。おりますぞ」

韓書記官はナンバー・スリーで庶務担当だ。

「李台建副領事！」

「はい」

李副領事は、神戸領事館からきた。西独の韓国留学生連行作戦に参加したという。後にこのメンバーから外され、陸軍大佐の洪性震一等書記官と交代することになる。

「劉永善副領事！」

「はい」

劉副領事は、横浜領事館からきた。いまをときめく李厚岳情報部長の姪の夫であった。

「柳春成二等書記官！」

「はい」

柳書記官は、金致源情報部次長の姪の夫だった。

それぞれ思いもかけぬ強力なバックがあり、作戦要員として手柄をたてるチャンスがまわってきたのだ。

「金車雲一等書記官！」

金書記官は無言のまま、むっとしたように彼を見返した。形式的な点呼なんて、いい加減にしてくれという顔付きだ。

小肥りのがっしりした体軀の持ち主。四十七歳。忠清南道出身の陸軍中佐だった。

仙台坂は名の示すように、伊達家藩邸のあった旧跡である。金書記官は、その仙台坂には、週に一度、別館一階のデスクにやってくるだけだ。もっぱら陰地、すなわち地下活動をしている。

金存権にとっては、第七局長時代以来の旧部下だが、その旺盛な行動力にむしろ嫌悪感をおぼえるほどだった。「よろしい。では金車雲書記官……ソウルへ出張して李鉄熙次長補から受領してきた極秘作戦の内容について、諸君に説明してやってくれたまえ」

「は、承知しました……」

金車雲は、事務的な、抑揚のない口調で説明し始めた。説明が核心にふれてくると、列席者の間から、ざわめきがおこった。うすうす予期してはいたが、何のために

集められたかをハッキリ知ったのである。

金大中キムテグジュン抹殺計画の行動要員。それがふり当てられた任務であった。

金存権も、ソウルへとつぜん呼びつけられて、李厚岳部長から命令を受けたときは、気も動転するほど驚いた。

「部長！ それは、あまりにも無謀な計画です。日本でもそんなことをすれば、大騒ぎになります。金実旭キムシルヒョク部長時代の『東ベルリン事件』どころじゃすまされないでしょう。たとえ拉致らちそのものには成功したとしても、東京から金大中の姿が消えれば、いやでもあの事件を思い出すでしょうからね」

「そうだろうか」

李厚岳は、うすら笑いするばかりだった。

朴正熙パクチンヒ大統領の側近ナンバー・ワンとしての権力を手に入れようとする彼にとって、最大のライバルは首相の金鐘泌キムジョンピルと、大統領警護室長の朴鐘圭パクジョンギだった。とりわけ、KCIA部長と首相との対立抗争の根は深かった。

五・一六軍事クーデター決起組の中核だった陸士八期

生で、大統領の姪と結婚し、政権の表街道を闊歩かつぽしてきた金鐘泌とちがいが、李厚岳はクーデターで息の根を止められた張勉チャミンゴン。政権側の情報畑から、敗者復活戦で忠誠競争に勝ち抜き、のし上がってきた外様とぎさまだ。

前年三月、駐日公使からKCIA部長に転出すると、ピョンヤンに乗りこみ、七・四南北共同声明の推進者となり、アメリカのベトナム後戦略に協力し、ニクソンの朴政権批判をかわそうとした。つねに一歩先んじて、政治の裏街道で力を行使することにたけていた彼を、朴大統領は内懐ろ深く抱えこんだのである。

朴正熙が彼の焦りを知っていたように、彼もまた独裁者が自分に何をさせたいかよく知っていたのである。

金大中に対する朴正熙の憎悪は凄まじいものがあった。憎悪の焰ほので、青瓦台チョンワデは燃え上がりらばかりだといわれた。頂点に達したのは、一九七一年四月の大統領選挙だ。

新民党候補の金大中は、野党候補としては韓国選挙史上初めての最多票五百四十万を獲得し、朴正熙の六百三十五万票に九十五万票の差とせまった。

与党の共和党は、報道や資金の封じ込めのほか、ありとあらゆる組織的な買収、妨害、脅迫など腐敗選挙の極致と呼ばれる手段を弄した。二百万から三百万票の不正票を奪い取り、銃声のない第二クローデターといわれたほどだった。

朴正熙は、金大中に根深い劣等コンプレックスを持っていた。

演説でも容貌でも、遠くかなわない。金大中の行くところ、民衆は歓呼して集まり、拍手と笑声と感動の渦がわく。

「キム・テ・ジュン！ キム・テ・ジュン！ キム・テ・ジュン！」

救世主のように、その名が呼ばれた。

KCIAや憲兵や警察が、聴衆の中にいく重にも網を張っているときは、会場には叫び声ではなく、呻き声が満ち満ちた。

「ウォーン！ ウォーン！ ウォーン！」

じっさいには、朴大統領が負けたと公然といわれるに

いたったとき、銃剣で政権を奪取した者が危機感をいっそう高め、どんなことをしても政敵を葬りさろうと決意したとしても不思議ではない。

朴正熙は一九一七年九月、慶尙北道に生まれ、金大中は一九二五年十二月、全羅南道に生まれている。新羅と百済が、それぞれの故郷なのである。

新羅文化と百済文化との比較が、しばしばなされる。対照的に好みがわかれるのだ。

古都慶州にケンランと象徴される前者から、へ古代新羅の栄光を」という、権力への願望を秘めた国造りスローガンを思いついたのは朴正熙だった。

金大中は全羅道を、反骨の精神と歴史を育んだ故郷として見る。豊臣軍の侵攻と戦った名将李舜臣も、東学党の乱の革命家たちも、日本統治時代の光州の反日学生運動もみな全羅道におこっている。

民衆と民族の側に立ち、粘り強く戦う理想家肌の抵抗者を、数多く生み出している。

金大中は、しかし、偏狭な郷土愛を、講演会で話した

びに排撃した。

「皆さん、われわれの祖先が千三百年かけて傷をいやしたはずの地方色を、朴政権がふたたび呼び起こしたのです。大韓民国の人々の血の色はちがいますか？ 言葉がちがいますか？ ここに立っている金大中も、東西南北関係のないところがありません。生まれは全羅道で、暮らしたのはソウルで、選挙区は江原道です。妻の実家は忠清道で、嫁は北からもらい、慶尚道だって……?! 私の家系が金海金氏だから、ホンモノの慶尚道人です……」

朴政権は、通称「慶尚道政権」と呼ばれていた。青瓦台を取りまく、中央情報部長の李厚岳、大統領警護室長の朴鐘圭ら、ことごとく慶尚道出身だった。

大統領選挙につづいて五月に行なわれた国会議員選挙の選挙運動最終日、光州飛行場へ向かう金大中の自動車に大型トラックが真正面から突っこんできて、九死に一生を得るといふ暗殺未遂事件がおこった。

金大中は七二年十月、この事故でうけた外傷の後遺症、股関節変形症および坐骨神経痛を治療するため日本を訪

れた。このとき、独裁者の永久執権をかためる非常戒嚴令の宣言と、政党による政権交代の道をふさぐ十月維新体制の発足に遭遇し、国内活動の場を奪われたことを知って、海外亡命を決意するのである。

「部長！ どうか無謀な計画をご再考ください」

と、金存権は、李厚岳にせまっていた。

ことがかりにも失敗した場合、自分がどうなるかを想像して戦慄したのだ。

「それはできません！ 中止も変更もできません」

「中止も変更もできませんですって?!」

「そうだ。これは、至上命令なんだからな」

李厚岳自身、再度の下命をうけたばかりだった。

金存権は、全身から血の気がひき、額に冷や汗がふき出すのをおぼえた。部長の背後から、彼の心の隅々までをも見通すように鋭い、凶悪な視線が放たれているのだ。

李厚岳は終始一貫、朴正熙の露払いをしてのし上がった男だ。公報室長をしていたころ、大雪が降ったとき、すかさず、朴議長が現地部隊に雪害除去の緊急出動を命



じたという新聞発表をした。朴議長が相好そうごうをくずして事後承諾をあたえたことは、いうまでもない。

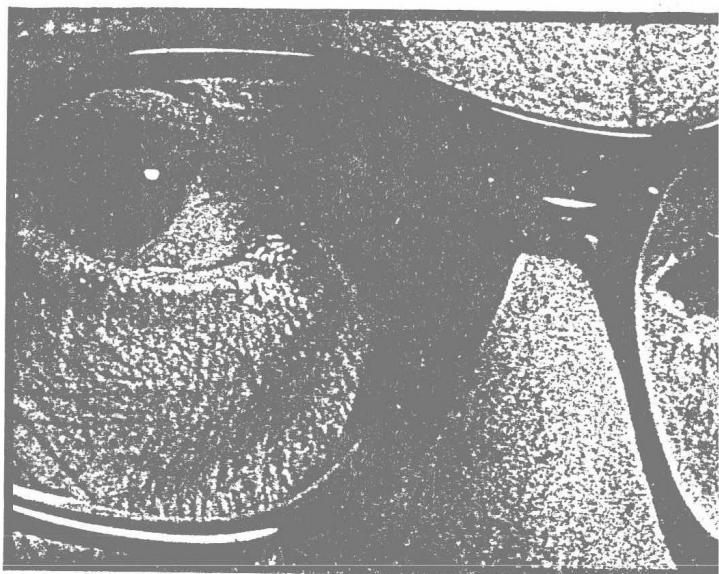
その年の二月、南北共同声明の推進者として金鐘泌および朴鐘圭をリードしつづつあった李厚岳は、KCIA本部を出たところで何者とも知れぬ敵に狙撃された。さらに、軍に一時監禁されて独走にストップをかけられた。だから、朴大統領にいつそう密着し、実力者らしい手柄を見せなければならなかった。

はしっこさも持っていたが、ただのハネ上がりではない。直接命令がないのに、重大な責任問題の生ずるような仕事をするわけがない。

「ぐずぐずいわずに、日本をよく知ってる現場の実行責任者を選んで、本部へ連絡によこしたまえ。何度もいうように、この作戦はたとえ国がどうなるうとも強行しなきゃならない性質のものだ。うまくいかなかったら、きみももうおしまいだな」

李厚岳は冷然と申しわたした。

「はい。わかりました」



と、金存権は答えて、唇を噛んだ。

ソウルから帰ってきた金車雲は、作戦計画の内容説明をこう結んだ。

「ソウルから現地行動の総指揮者として、尹進元ユンジンウォン工作第一団長が派遣されてくる予定になっております。……尹進元団長は海兵大佐です。作戦総指揮官の李鉄熙次長補から、絶対服従するようにとのことでした」

一同は沈黙したままだ。

李鉄熙は陸士二期生だが、もとは日本の陸軍中野学校を出た、生え抜きの諜報員だ。重苦しい沈黙だった。

「何か質問は？」

と、金存権がいった。

黒色の行動部隊はこいつらだ。

もともと、表立って外交官として活動しているメンバーは白色チームだ。この非常の大作戦に当たり、行動要員はすべて黒色の陰地勤務へ移した。留学生、学者、商社員などに偽装した本物の黒色チームや、特殊工作の大

物政治家、実業家で組織された青色チームともちがう。

金存権は白色の陽地勤務として残り、合法面で活動すればよい。金大中のかつての同志である老政治家や、親戚の国会議員を囮としてうまく近づけさせるように誘導し、配置すること。

ことに、ソウルからの命令どおり、老政治家に帰国工作をもちかけさせる。老政治家は本気になって、説得の役目を果たそうとする。すくなくとも、そう信じたいたろうから、信じるがままにさせておくこと。

金大中は必ずノーという。両面作戦のバトン・タッチはそのときだ。舞台裏の陰地で働く、黒色行動隊の一番である。金存権は終始、自分の手を汚さなくてすむのだ、と考えていた。

「質問がなければ、今夜はこれで散会にするが、最後にしょくんに、今後とも肝に銘じておいていただきたい注意事項がある……」

金存権は、実行責任者の金車雲に向かつて、おぼえてあるならきみの口からいってみろというように顎をしや

くった。

「それでは、わたしのほうからおつたえします」

金車雲は、一同をシロリとおどかすような目付きで見わたしながら、

「今日ただいまから、アメリカCIAおよび日本警察は、行動隊にとつては味方ではなくなる……。同盟国の司法警察官として利用し得る公安関係は、従来どおり最大限に利用するとしても、刑事警察はわれらの前途に立ちふさがるかもしれない、充分に警戒すべき敵である。こう考えておいていただきたいのであります」

「アメリカ人や日本人に対しては、どんなことがあつても騙し通せ、ということですか」

と、李台建が反問した。

「李くん！ 口のきき方に気をつけたまえ。こういう場合は、真の意図をあくまでも、あくまでも秘匿するといふんだよ」

金存権は、自分にもいい聞かせるようにいった。

第一章
五人の男たちと影の政府との戦いの章



1 姿なき敵

七月十日午後六時、アメリカから羽田空港に到着した金大中は、出迎えの車で都心へ向かい、西新宿の高層ビル街にある京王プラザ・ホテルに入った。

沼田忠。ぬまた・ただし。

チェック・インしたときの日本人名だった。フロントの係員は、何一つ疑わなかった。

部屋は四十階のスイート・ルームであった。

いっしょにホテルまでやってきた出迎え人の中で、最後まで残ったのは金銅忠キムドンチュンだった。

金銅忠は同郷の出身者。四十八歳の金大中よりも四歳年長だが、幼な馴染みの小学校同級生である。

全羅南道木浦モッポの荷衣島ハイドが、金大中の故郷であった。靴カバン

を肩に、手をつなぎ、離島に開校されたばかりの普通学校へ四年間、ともに通学した仲だ。模範少年とガキ大将だった。

群を抜いて成績の良かった金大中は、当時の名門校、木浦商業学校へ首席で進学し、金銅忠はやがて日本へ渡り、苦学しながら牛込の主計商業に学んだ。運命は二人を分かったが、たがいの出自しゅつ、家族も知りつくした、日本ではいちばん気のおけない兄弟のような間柄だった。

政治嫌いの彼は、どんな役職にもつかず、野心もなくただ室内装飾関係の商売をしながら、金大中の世話役を勤められればよいと考えていた。

「話はずきないけれど、あなたは時差で疲れているから、早くバスを使って休んでください。明日の朝は、さっきの青年たちが迎えにくるまで、けっして部屋を出ちゃいけませんよ。いいですか！」

金銅忠はいつもの温和さに似ず、子供を叱るように強く釘をさした。

「ありがとう、ありがとう。ほんとうに心配かけます